

《資 料》

明治期『府県統計書』における
工業生産の把握

神 立 春 樹

- 1 はじめに
- 2 主要年度における工業生産の把握
- 3 『府県統計書』における工業生産の把握

1 はじめに

筆者は、これまでにわが国における近代工業の発展過程を検討するに際しての最も包括的な、基礎的な資料である『農商務統計表』における工業生産の把握についての検討を行ない、その特徴と制約をあきらかにしてきた。明治14年設置の農商務省の明治16年省達第21号「農商務通信規則」にはじまる統計規程の推移、ならびにそれによって把握されたものの『農商務省統計表』における記載にみられる特徴と制約を要約的に記せばつぎのようになる。⁽¹⁾

まず、農商務省の統計規程、ならびに『農商務統計表』は、基本的には民間産業の発展を把握したものである。明治36年度からは諸官庁直轄工場を記載するが、それ以前は農商務省直轄工場を明治18年度～24年度と明治26年度について記載するにとどまる。工業生産の把握は種目別工業調査と工場調査の二系列において行なわれている。種目別工業生産調査には、紡績業、洋紙製造業等の近代的移植工業部門も含まれているが、織物業、製糸業、陶磁器業、漆器製造業、和紙製造業、畳表真蔭及び莞蓮業等の伝統的な在来産業がその中心である。青銅器・銅器をふくみ、またマッチ製造業のごとき移植産業も扱えられているが、比較的少数に限られた、消費財主体の伝統的な在来産業把握となっているのである。

そのうえに管轄のちがいもあって除外されているもの（酒類等）があり、その種目数はいっそう少なくなっている。他方、工場調査は、明治42年省令第59号「工場統計報告規則」にいたって職工5人以上工場調査となり、ほぼ網羅的となるが、なお広汎に存在する職工5人未満の製造所の把握はなく、部門によってはその一部しか把握していない。ましてや明治42年以前の段階での、職工10人以上工場を対象とする工場調査で把握されているのは、多くの部門においてそのごく一部分にすぎないのである。農商務統計における工業生産把握はこのような制約をもつものとなっているのである。

ところで、明治10年代なかばから各府県において刊行される『府県統計書』にはいずれにも工業生産の記載がみられ、各府県の工業生産の把握がなされている。この『府県統計書』については明治17年制定の『府県統計書様式』の「製表通則」に「此表式ハ官省ノ令達等ニ依テ調査セル材料ニ基キ統計書ヲ編製スルノ主意ヲ以テ調製セルモノナリ」とあるように、官省の令達にもとづくものである。しかしこの「製表通則」には同時に、「然レトモ緊要ト認ムル事項ノ如キハ右令達等ニ依テ調査セサル者ト雖其式ヲ設ケタリ」とあって、この様式には官省の令達によって調査されたものではないものが含まれているとともに、「様式ヲ示セル事項ノ他ニ緊要ノ事項ヲ調査セシ者アラハ諸式ヲ見合セ適宜ニ其表ヲ増加スベシ」と記されていて、各府県の独自の事項が追加されるべきことが指示されている。⁽²⁾さらに、このように府県による独自の事項の記載については、この『府県統計書様式』の「工業及製造」に属する「第97製作及製造高」表式の註記として「本表ハ其地方ニ於テ最も多ク製作又ハ製造スル物品ヲ掲ケベシ…」と明示されているのである。⁽³⁾

このように、『府県統計書』における工業生産の記載は、基本的には農商務省の統計規程にもとづくものでありながら、なお各府県で独自の側面をもつものとなっているのである。本稿は、主として、明治42年の「工場統計報告規則」により、わが国工業の把握がほぼ網羅的となるまでの時期について、農商務統計の工業生産把握における特徴＝制約とのかかわりあいでの『府県統計書』における工業生産の把握について検討するものである。その際にいくつかの地方工業県ともいべき県、すなわち、製糸業の展開した長野県、絹織物業の展開した福井県、綿織物業の展開した愛媛県、綿工業とともに農産加工業の展開した岡山県をとりあげて、それらの事例について検討していくこととする。

2 主要年度における工場生産の把握

まず、『府県統計書』における工業生産の把握を主要年度についてみていく。ここでの主要年度とは農商務省の統計規程とそれを反映した『農商務統計表』の年度であり、この⁽⁴⁾年度を基準として、先にあげた地方工業県についてみていくこととする。

(1) 明治17年度基準

明治16年に「農商務通信規程」が制定され、それにもとづく工業生産把握が『農商務統計表』に記載される明治17年度を基準とする。

① 農商務省の統計規程 明治16年農商務省達第21号「農商務通信規則」の「工業通信事項」

工業通信事項第一項工場 職工10人以上使用工場調査。蒸気機関使用工場、水車使用工場、蒸気機関・水車等を使用しない工場について、工場名称、工業種類、資金、機関、重なる機械、役員、職工、就業日時、役員給料、職工賃金、石炭・薪、原料価、雑費、製造品数量・価額を記入する。

工業通信事項第二項品目 品目別生産高(数量・価額)調査。その品目は、これは佐賀県が「農商務通信規則」によって定めた「工業通信事項及附録様式」によるが、糸(生糸を除く)、織物、莫大小、畳表、紙類、金属器、金玉器、陶器、磁器、瓦類、七宝器、漆器、角甲牙器、醸造物、油類、化学上製品、製革及革具、罐詰、機械、船舶、車、活字版類、此他著名の工産物となっている。これらのうち、製糸、織物業については、製糸専業・織物専業、製糸織物兼業、他業より製糸織物業を兼ねる者、のそれぞれの製造家数、人員(男女)を、織物についてはこのほかに機数を記し、金属器については踏鞴数・吹き数を、陶器、磁器、瓦類、七宝器については窯数を把握し、金玉器、漆器、醸造物、油類、化学上製品、製革及革具については製造家数を把握することになっている。生糸、製茶、製糖は農業通信事項に属する。

② 『農商務統計表』における記載 明治16・17年度を表示する第1次のそれには、第一項、第二項に対応する記載がある。

工場 蒸気機関ヲ用フル工場、水車ヲ用フル工場、蒸気機関及水車等ヲ用ヒザル工場について、個別工場ごとの工場名、工業種類、役員(男女)、職工(男女、満15才以下男女)、就業日時(一年間日数、一日時間数)を記す。

品目 製糸織物業、畳表製造、紙類製造、金属器製造、陶磁器製造、漆器製造、油類

製造、製革及革具。生産高を生産数量または生産価額で示す（織物については両者）。

これらのうち、製糸織物業については専業、兼業別に製造家数、職工男女数を、製革及革具、油類、漆器は製造家数を、陶磁器は窯数を記載する。このほか農業部に属する生糸の生産高（数量）を記載している。

③ 『府県統計書』における記載

岡山県—『明治17年岡山県統計書』

工場 個別工場ごとに名称、地名、機関運転力ノ種類、職工延人員、資本金、経常金、収入金、製出高、代価を記す。

製作及製造高 靴、編笠、綿糸、筆、洋燈心、団扇、足袋、畳表、刺煙草、紙、石筆、生糸、漆器、織物、軸木、燐枝、瓦、陶器、石灰について製作および製造高、製作および製造人員を記す。

愛媛県—『明治17年愛媛県統計書』

工場 種類及場名、郡名、機関運転力ノ種類、職工延人員（男女）、資本金、経費金、収入金、製出高、代価、を記す。

製作及製造品 摺付木、保多織、銅、磁器について、製作及製造高、製作及製造人員を記す。以上のほか、酒類の製造石高、製造人員、生糸産額、製茶家数・産額を記す。

長野県—『明治17年長野県統計書』

製作及製造高 製糸、天蚕糸、蚕種、綿織物、蚕卵原紙、真綿、木綿織物、麻布、蚕籠、元結、鋸、刃、鉄器雑類、靴、畳糸、建具、漆器、指物、桶、轆轤挽木地、竹細工、紙、晒紙、屋根板、桧笠及傘、畳及畳表、生皮芋、山塩、櫛、陶器、種油類、足袋、足袋裏、下駄、種粕、醬油、煙草、瓦、味噌、炭、石灰、について製作および製造高、製作および製造人員を記す。このほか酒類の石高、醸造人員を記す。

工場 生糸、天蚕糸、絹織物、陶器、瓦、靴の個別工場の場合、地名、機関運転力ノ種類、職工延人員、資本金、経常金、収入金、製出高、代価を記す。

福井県—『明治17年福井県統計書』

工場 個別工場ごとの種類及場名、地名、機械運転力ノ種類、職工延人員、資本金、経費金、収入金、製出高（数量・価額）を記す。ほかに農業に属する養蚕家及繭糸ノ産額、製茶家及製茶ノ種類において生糸、製茶の産額（数量）を記す。

(2) 明治19年度基準

明治19年農商務省令第1号「農商務通信事項様式」が制定されるが、それにもとづく『農商務統計表』における記載年度を基準とする。明治19年は愛媛県は『県統計書』を欠くが、『農商工統計表』があるのでそれによる。福井県は『県統計書』『勸業年報』をともに欠くので記載状況を検討することができない。

- ① 農商務省の統計規程 明治19年農商務省令第1号「農商務通信事項様式」により兵庫県が定めた「農商務通信手続・通信事項」によるとその内容はつぎのとおりである。

製作及製造品表 織物、畳表、紙類、陶器、磁器、製革。以上について地名別、製出高・価額、製造家数。陶器、磁器はほかに窯数を把握する。

工場表・工場ノ製品及代価表 個別工場ごとに、種類（製造品名）、場名（工場名）、地名、機関運転力ノ種類、職工延人員、資本金、経費金、収入金、製出高・代価を調査する。この様式には会社部に工業諸会社及製造所表があり、一個人の資本によるものをも含めて、職工・雇人10人以上のものについて、名称、営業種別、所在地名、創業年月、支店数、資本金、株主人員、役員、職工・雇人、蒸気機関・水車（数・馬力）、営業収入金、営業支出金、について把握する。

なお、製糸、製茶、製糖は農業部に属し、製糸、製茶は製造戸数をも記載する。

- ② 『農商務統計表』における記載 明治19年度を表示する第3次には、個別工場について第1次と同様の事項に加えて製品代価を記していて、各工場の生産額があきらかとなる。このほかに農商務省の直轄工場について各工場ごとの創業年月、原動機、製造器具、役員、職工、就業時間、役員給料、職工給料、石炭、薪、興業費、原品買上代、諸給料、営業費、製造物価額を表示する農商務省所属工場、各紡績所ごとの錘数、管糸出来高、繰綿需要高、落綿、屑糸、販売地方相場を表示する綿糸紡績所の両項目が第2次から記載されているが、この第3次にもこの両項目が記載されている。しかし品目別では織物と農業に属する生糸のみである。第4次には品目別では織物、畳表、紙類、陶磁器、油類、製革及革具と農業部の生糸、製糖、製茶となっていて、品目は明治19年の「農商務通信事項様式」にしたがった兵庫県の「農商務通信手続・通信年項」のあげたものを記載しているものの、製造家数はわずかに油類において示されているにすぎない。陶磁器において窯数が記載されているが、この品目別は第1次より簡単となっているのである。なお第4次には個別工場、綿糸紡績所の項目はなくなっていて、これらの記載を欠いている。

③ 『府県統計書』における記載

岡山県—『明治19年岡山県統計書』

工場 個別工場ごとの種類及場名、地名、機関運転力ノ種類、職工延人員（男女）、資本金、経費金、収入金、製出高・代価を表示する。

製作及製造高 靴、編笠、綿糸、筆、洋燈心、軸木、雲齊、畳表、石筆、刻煙草、紙、団扇、足袋、生糸、織物、漆器、硯、瓦、陶器、石灰について生産数量、製作および製造人員を示す。ほかに酒類について清酒、濁酒、焼酎、白酒、味淋、銘酒別に醸造石高、醸造人員を表示し、醬油について製造場、営業人、石高を示す。この年も生糸は農業部において養蚕家及繭糸ノ産額なる項目において産額（数量）が把握されている。

愛媛県—『明治19年分愛媛県農商工統計表』

工場 工業諸会社表において個別工業会社ごとの把握がある。

品目別 製糖、紙類、製茶、木蠟、蚕糸、絹織物、綿織物、陶器、磁器、乾鰯搾滓魚油、食塩について記載している。うち絹織物、綿織物は製造戸数、製造人員、織機数、生産数量・価額を、木蠟は製造家数、職工人員、数量・価額を、製糖、紙類、製茶は製造所（家）数、生産手段（搾車・釜数、漉船数、焙爐数）、生産高を、陶器、磁器、食塩は生産手段（前2者は窯数、食塩は竈数）、生産高を、生糸、乾鰯搾滓魚油は生産数量のみを把握している。ほかに酒類、醬油、菓子について戸数、生産数量を記している。

長野県—『明治19年長野県統計書』

工場 生糸、天蚕糸、絹及木綿織物、瓦、煉瓦、陶器、石灰、硝子、麦藁細工、靴という品目別に個別工場の場合名、所在地、機関運転力ノ種類、資本金、経常費、収入金、純益、製品及代価を記載している。

製作及製造品 製糸、真綿、生皮苧、天蚕糸、綿糸、器械糸、絹布、上田縞及紬縞、縮緬、綿布、麻布、麻苧、畳糸、足袋、足袋裏、細見、鼈甲細工、櫛、轆轤挽細工、竹細工、麦藁加工、蔓加工、桧及菅笠、雨日傘類、元結、寒天、紙、筆、団扇、煙草入及煙管、蚕籠、畳、建具、指物、桶、炭、種油、種粕、陶器、石灰、瓦について、製作及製造高、製作及製造人員を記す。ほかに酒類について石高、醸造人員を、また農業部において生糸の生産高を把握している。

なお、この明治19年の「農商務通信事項様式」は明治22年に改正される。その要点は、製作及製造品表のものと各種工産物の把握が生産高（数量・価額）のみになったことと、

工業会社及製造所表のもとでの工場は資本金1000円以上となったことである。工業生産の把握のうえで大きく後退しているが、これはまた『府県統計書』における工業生産の把握に及んでいる。例えば岡山県についてみると、明治22年度の『第12回岡山県農商課年報』における工業は、藍、製糖、油、醬油、酒類、畳表、陶磁器、織物を記載するが、油に製造家数があるのみで他はすべて生産高(数量、価額、その両方またはいずれか)のみであり、しかも織物に児島郡とその他の区分があることをのぞいて他はすべて全県一括となっている郡別把握がなくなっているというように、大巾に後退しているのである。『勸業年報』の記載は『県統計書』の記載より詳細であると思われるが、その『勸業年報』においてさえこのような記載状況であり、明治27年にいたる時期が工業生産の把握のうえで最も制約の大きい時期となっている。

(3) 明治27年度基準

明治27年農商務訓令第14号「農商務統計様式」が制定されるが、それにもとづく『農商務統計表』における記載年度を基準とする。岡山県、福井県は『県統計書』を欠くが、それぞれ『岡山県第17回勸業年報』、『福井県第11回農商工年報』についてみていく。

- ① 農商務省の統計規程 明治27年の『農商務統計様式』における工業生産把握はつぎのように規定されている。

各種工業調査の調査品目は織物、陶磁器、漆器、青銅器・銅器、摺附木、和紙、畳表・苳蔭類、菜種油及生蠶。生産高(数量・価額)のほかに製造戸数と、織物、陶磁器、青銅器・銅器、摺附木は職工数、さらに織物は機数、陶磁器は窯数、砂糖は搾車数を把握する。このほかに茶、砂糖、漆液があり、製糸とともに農部に属している。

工場調査は各工場ごとの工場票となる。職工10人以上の工場について、工場名称、製造品種、工場所在地名、持主名、創業年月、職工人員(男女)、原動力(蒸気力・電気力・水力の機関数・公称馬力数)を調査する。

- ② 『農商務統計表』における記載 明治27年制定の「農商務統計様式」にもとづく調査は同年度から行なわれ、それにもとづく表示は第11次から行なわれる。

各種品目別工業調査 綿糸、織物、陶磁器、漆器、青銅器・銅器、和紙、マッチ、畳表・苳蔭、輸向苳蔭、菜種油、生蠶について、製造戸数、生産額(数量・価額)が示される。織物、陶磁器は職工数、生産手段(織機数、窯数)が、漆器、青銅機・銅器、マッチには職工数が加わる。また綿糸、西洋紙も後にみる各工場別記載を合計すると製

造場数、職工数、生産手段、生産高（数量・価額）があきらかとなる。そのほか農業部に属する製糸は戸数を製造所・自宅にわけて把握しており、また生糸生産高を器械取と其他にわけて把握している。砂糖、製茶も製造戸数、生産高を記載している。

この年度には従来からの綿糸紡績所とともに第10次にはじめて表示された洋紙製造所の個別工場ごとの記載がある。各製造所ごとの払込資本金、原動力、機関数、公称馬力数、1年就業日数、1日就業時間、原料（襤褸・稲藁）、石炭、職工人員（男女）、出来高、平均1磅相場、を記載している。なお綿糸紡績所は、各紡績所ごとに、所名、払込資本金、蒸汽力水力、1日平均使用実馬力数、石炭（消費高・1万斤平均代価）、1実馬力1時間石炭消費高、職工数（男女）1日平均、男女職工賃金（1日平均）、1日平均運転鍾数（堅針・横針）、製糸番手平均（堅針・横針）、繰綿需要高、落綿出来高、屑糸出来高、1梱製糸平均代価、という詳細な事項の記載となっている。

工場票による詳細な工場調査の結果は、少くとも第8次までは個別工場ごとであったものが、この第11次では年末現在の工場数を府県別あるいは工業種類別に集計した統計数値として表示されている。府県別については、「蒸気力ヲ用ユルモノ」、「水力ヲ用ユルモノ」、「汽力及水力ヲ用ユルモノ」、「汽力及水力ヲ用ヒサルモノ」、にわけて把握している。個別工場ごとの記載がなくなっているが、わが国工場を統計数値としてはじめて示すものとなっている。

③ 『府県統計書』における記載

岡山県—『岡山県第17回勸業年報』（明治17年度）

工場表 工場名称、製造品種、工場所在地名、創業年月、職工人員（男女）、原動力（蒸汽力・水力）、持主名。

品目別 漆器、砂糖、菜種油、生蠟、陶磁器、摺附木、織物、製紙、漆汁、産出高（数量、価額の双方、またはいずれか）を記載する。これらのうち、織物は製造戸数、織機数、職工数を、漆器、摺附木は製造戸数、職工数を、砂糖、漆汁は製造戸数、生産手段（砂糖は搾車数、漆汁は漆樹数）を、菜種油、生蠟は製造戸数を記載している。このほかに生糸の器械、座繰別生産高、製茶生産高を記している。

愛媛県—『明治27年愛媛県統計書』

工場 工業会社及製作所として個別に、会社又ハ持主氏名、所在地名、創業年月、営業種類、株主又ハ持主人員、資本金、職工、機関（個数・馬力）を記す。

工産物 織物、陶磁器、漆器、青銅器・銅器、摺附木、和紙、畳表、蓆、菜種油、生蠟、晒蠟。生産額のほか、織物は製造戸数、職工数、織機数を、陶磁器は製造戸数、職工数、窯数を、漆器、青銅器・銅器、摺附木は製造戸数、職工を、その他は製造戸数を記してある。このほか、製糸（製造戸数、生産高）、製茶（製造戸数、生産高）、砂糖（製造戸数、搾車数、生産高）、漆（製造戸数、漆樹数、生産高）を記載している。

長野県—『明治27年長野県統計書』

品目別 織物、紙、漆器、畳表、瓦、煉瓦、煙草、陶磁器、元結、酒類、醤油、菜種油、寒天、菓子について生産高（数量、価額の両方、またはいずれか）を記す。これらのうち織物は製造戸数、織機数、職工数（男女）を、紙、陶磁器、菜種油は製造戸数を、煙草は製造主、酒類は醸造場数、醤油は営業人員、菓子は製造人員を記し、また、瓦、煉瓦は窯数を記載している。このほか農業に属する生糸の生産高が記されている。

工場欄はなく、工業会社及製作所ノ製品及代価において、生糸、織物、蚕種、元結、寒天、石灰、煉瓦、土管別の工場生産数量・価額が郡別集計としてある。

福井県—『福井県第11回農商工年報』（明治27年度）

工場 名称、所在地、創業年月、資本金、株主又ハ組合人員、職工人員、蒸汽機関・水車（個数・馬力）。

品目別 絹織物、絹綿交織物、木綿織物、麻織物、紙、漆器、陶磁器、畳表、蓆、製革、油、煙草、打物外11品（打物、鋳物、蠟燭、傘、笠、草履、草鞋、縄蓆、瓦、炭、石灰）。生産数量、生産額の双方またはいずれかを記す。これらのうち、絹織物は製造家数、織機数、職工数（男女）を、漆器は製造戸数、職工数を、陶磁器は製造戸数、窯数を、畳表、蓆、油のうちの菜種油は製造戸数、煙草は製造人を記載する。その他酒等醸造物の製造人、生産数量・価額、醤油の醸造人、醸造高、酢の醸造家数、醸造高・価額がある。また農業部に属して製糸、製茶があり、前者は製糸戸数（自宅、製造所）、数量・価額、後者は数量・価額が記されている。

(4) 明治32年度基準

明治32年の「農商務統計様式改正」にもとづく工業生産の把握結果が『農商務統計表』に記載される明治32年度を基準とする。愛媛県、福井県は『県統計書』を欠いているのでともに『農商工年報』によって検討する。

- ① 農商務省の統計規程 明治32年農商務省訓令第34号「農商務統計様式改正」において

はつぎのように規定されている。

各種工業調査の品目別としては、綿糸紡績、織物、畳表・蓆・莞蔴、陶磁器、工産物雑類（油類、生蠟、晒蠟、製藍、樟腦油、薄荷油、薄荷腦、摺附木、和紙、革類、麦桿真田、青銅器・銅器）。これらについて製造戸数、価額を把握するが、織物は織機数（器械機・手織機）、職工（男女）、陶磁器は窯数、職工（男女）、工産物雑類は職工（男女）を記すことになっている。この改正によりはじめて規程上にでてくる綿糸紡績については、各紡績所ごとに、払込資本金、1日平均運転ノ錘数（堅針・斜針）、管糸出来高（堅針・斜針）、平均1日使用実馬力（蒸気・水車）、営業日数、1日平均就業時間、石炭消費高、職工（男女）、職工賃金（男女）、主要製糸番手数、同1梱（48貫目）平均実額、繰綿需要高、落綿出来高、屑糸出来高を把握することになっている。ほかに蚕糸、茶、砂糖が農業部に属するが、明治27年の規程と同じである。各個別工場ごとの工場票は、1箇年間就業日数、1日就業時間が加わり、職工人員が職工及徒弟人員となったうえそれぞれ男女ごとに14才以上と14才未満に区分されており、さらに日傭人夫（男女）を調査することとなっている。また職工1日の賃金欄が加わっている。このように明治27年の工場票にいくつかの項目が加わり、いっそう詳細な把握が行なわれることになっている。

- ② 『農商務統計表』における記載 この改正様式にもとづく把握は明治32年度から行なわれ、第16次にその結果が表示される。綿糸紡績所、西洋紙製造所は個別工場ごとの把握が記載されている。品目別では織物、畳表蓆莞蔴、陶磁器、漆器、青銅器・銅器、油類、生蠟・晒蠟、製藍、樟腦油及樟腦、マッチ、革類；麦桿真田、和紙について製造戸数、生産額と、畳表蓆莞蔴以外は職工数を把握している。織物と陶磁器は生産手段（前者は織機数、後者は窯数）をも記載している。このほか蚕糸、製茶、砂糖は製造戸数と生産高（数量・価額）を記している。

- ③ 『府県統計書』における記載

岡山県—『明治32年岡山県統計書』

工場 名称、製造品種、所在地名、創業年月、職工人員(男女)、原動力蒸気機関数・馬力数、所有主氏名。

品目別 陶器、漆器、砂糖、油類、生蠟、畳表、花蔴、漆汁、製藍、摺附木、織物、足袋、和紙、麦桿真田紐、麦麵、罐詰、清酒、醬油、刻烟草、煉瓦、綿糸紡績。綿糸紡

績は各紡績所ごとの記載がある。他はいずれも製造戸数、生産高（数量・価額の両方か価額）を記載するが、なお織物は職工数、織機数（器械機、手機）、陶器は職工数、窯数（登窯、瓦斯窯、錦窯、風呂窯）を、畳表、花筵はともに織機数、漆汁は漆樹数、砂糖は搾車数を、漆器、摺附木、足袋、麦稗真田、素麺、罐詰、清酒、醬油、刻烟草、煉瓦は職工数を記載する。このほかに農業部に属する蚕糸が製糸戸数（製造所、自宅）と生産高（数量・価額）、製茶が戸数、生産高（数量・価額）を記している。

愛媛県—『明治32年愛媛県農商工年報』

工場 業務種類、工場名称、製品種類、工場所在地名、持主名、創業年月、職工人員（男女）、蒸気力・水力（個数、馬力数）。なお工場類別があり、織物業、製糸業、陶磁器業、鋳業、飲食品工業、紡績業、印刷業、燐寸業、煉瓦業別の郡別一覧表となっている。

品目別 織物、洋式機械紡績糸、陶磁器、漆器、和紙、摺附木、畳表其産類。洋式機械紡績糸は工場の錘数、就業日時、綿糸産額、繰綿需要高、屑物、馬力、石炭消費高、職工人員、職工1日平均1人給料、綿糸平均価格を記載する。その他は製造戸数、生産高（数量、価額の両方または価額）を記載するほか、織物は織機数、職工数（男女）、陶磁器は窯数（登窯、錦窯）、職工数（男女）を、漆器、摺附木は職工数（男女）を記載する。砂糖、菜種油、生蠟・晒蠟、漆汁は生糸、製茶とともに農業部に属している。いずれも製造戸数と生産高（数量・価額の双方または数量のみ）を記載するほか、砂糖は搾車数、漆汁は漆樹数を記している。

長野県—『明治32年長野県統計書』

工場 名称、製造品種、所在地、持主名、創業年月、職工数（14才以上、14才未満、男女）、徒弟（男女）、傭労働人夫（男女）、1ヵ年就業日数、1日就業時間、職工1日賃金（男女）、原動力（蒸気、電力、水力）。

品目別 織物、和紙、陶磁器、漆器、青銅器・銅器、畳表及其産、煉瓦、瓦、菜種油、生蠟、元結、製茶、醸造物（清酒、濁酒、味淋、焼酎、銘酒、酢、味噌、醬油）、蚕糸。いずれも製造戸数、生産高（数量、価額の両方またはいずれか）を記載（ただし煉瓦・瓦のみ製造戸数の記載なし）。これらのうち、織物は織機数、職工数（男女）、陶磁器は窯数、職工数を、煉瓦・瓦は窯数を、漆器、青銅器・銅器、元結は職工数を記載している。

福井県一『福井県第16回農商工年報』（明治32年度）

工場 工場名称、製造品種、工場所在地名、持主名、創業年月、職工人員（男女）、原動力（蒸気力、電力、水力）。

品目別 織物、紙、漆器、陶磁器、畳表蓆蔭及花蓆、製革、油、打物外11品（打物、鋳物、蠟燭、傘、草履、革靴、縄、蓆、瓦、炭、石灰、唐木細工、玉石細工、竹細工、石材）、酒（清酒、濁酒、白酒、味淋、焼酎）、醤油、酢。生産高（数量、価額の両方またはいずれか）のほかに、織物のうちの絹織物については羽二重、奉書紬、蝙蝠傘地、着尺物、薄絹、ハンカチーフについてそれぞれ製造戸数、織機数、職工数（男女）を、陶磁器は製造戸数、窯数（登窯、錦窯）、職工人員を、漆器、輸出向花蓆、畳表蓆蔭類、油のうちの菜種油、醤油は製造戸数を、酢は醸造家数、酒は製造人員を記載する。農産部に属する蚕糸、生蠶、晒蠶、漆汁、砂糖については生産高（数量・価額の両方、ただし蚕糸は数量のみ）、製造戸数（蚕糸は製造所、自宅別製糸戸数）のほか、砂糖は搾車数、漆汁は漆樹数を記載している。

(5) 明治37年度基準

明治37年の「農商務統計様式改正」にもとづく工業生産の把握結果が『農商務統計表』に記載されるのは第22次（明治38年度）からであるが、『府県統計書』には明治37年度から記載されている。この明治37年の改正を基準とする。

- ① 農商務省の統計規程 明治37年農商務省訓令第11号「農商務統計様式改正」においてはつぎのごとくに規定されている。

各種工業調査の品目としては、綿糸・絹糸・麻糸紡績、織物、蓆大小、陶器、煉瓦及瓦、漆器、畳表・蓆蔭及莞蓆、工業用薬品、漆液、油類、木蠶、製藍、薄荷、石鹼、和紙、西洋紙、機械製麦粉、寒天、罐詰、燐寸、製革、人造肥料、麦桿及経木真田、時計、玻璃製品、刷子、釦、工業物雑類（セメント、七宝、玻璃鏡、洋傘骨、フェルト帽子、燐寸軸木、紙製ナプキン、壁紙、絹製手巾、綿製手巾、竹製品、扇子及团扇、屏風、絹製品）。これらについて、漆液が職工数欄がないことを除いて、他は数量、価額、製造戸数、職工数（男女）を把握することになっている。これらのうちの織物は織機数、陶磁器は窯数、寒天は釜数を、機械製麦粉は原料使用高を把握することになっている。西洋紙は紡績と同様に個別工場ごとに多項目の記入を行なうことになっている。蚕糸類は農産部に属しているが、製糸戸数を10人繰未満、10人繰以上、50人繰未満、50人繰以上

100人繰未満、100人繰以上にわけ、器械、座繰、玉糸別について把握するようになっている。製糸がこうに規模別戸数把握となるが、織物業は工場、家内工業、織元、賃織業の4形態別（以下4形態別）となっているのである。なお、特定の織物について指定の府県について調査する織物指定特別調査がはじまるが、同様の染物指定特別調査、精製糖指定特別調査がはじまる。工場票は原動機欄が多様化している。

- ② 『農商務統計表』における記載 この改正様式にもとづく把握は明治37年度から行なわれるが、府県によっては明治38年度からとなっていて、『農商務統計表』としては第22次においてはじめて記載される。明治38年度分である。

品目別 紡績、織物、莫大小、陶磁器、煉瓦及瓦、畳表蓆座及輸出向莞蓆、工業用薬品、漆液、油類、木蠟、製藍、薄荷、石鹼、和紙、西洋紙、機械製麦粉、精製糖、寒天、籬詰、燐寸、革類、人造肥料、麦桿真田及経木真田、時計、玻璃、刷子、釧、各種工産物（手巾、絹製品、竹製品、扇子及団扇、屏風、セメント、洋傘骨、フェルト帽子、燐寸軸木、紙製ナプキン、七宝、玻璃鏡、壁紙）。紡績、西洋紙、精製糖は個別工場ごとの詳細な把握となっていて、これらの集計によって紡績、西洋紙、砂糖の製造所数、職工数、製造高および紡績の生産手段（鍾数）を知ることができる。そのほかは漆液を除いていずれも製造戸数、職工数、生産高を記載するが、織物は織機数（力機械、手機械）、陶磁器は窯数、寒天は釜数、漆液は漆樹数を把握している。この第22次においては織物が4形態別に把握されているほか、織物指定特別調査による輸出羽二重等についての詳細な調査結果が表示されている。農業部に属している蚕糸類は製糸戸数を器械製糸、座繰製糸、玉糸製糸別に10人繰未満、10人繰以上50人繰未満、50人繰以上100人繰未満、100人繰以上の規模別把握を行なっている。

工場は種類別、府県別の統計を表示している。それに第20次からの諸官庁直轄工場の個別工場ごとの記載がある。

- ③ 『府県統計書』における記載

岡山県一 『明治37年岡山県統計書』

工場は個別工場ごとの記載のほかに種類別と郡別の統計表示がある。綿糸紡績所、絹糸紡績所も各個別工場ごとの把握がある。

品目別では織物、花蓆、畳表蓆座、麦桿及経木真田、蚕糸類、刻煙草、足袋、薄荷、油類、和紙、陶磁器、籬詰、素麵、乾饅頭、煉瓦、瓦、機械製麦粉、漆器、漆汁、砂糖、

摺附木、清酒、醬油、其他工産物（西洋紙、扇子団扇、釦、製革、燐寸軸木）があり、製糸、油類、漆汁、砂糖が職工数把握がないほかはこれらすべてについて製造戸数、職工数、生産高（数量・価額の両方またはいずれか）を記載している。織物には織機数、花菱にも織機数、陶磁器には窯数、砂糖にも窯数、漆液には漆樹数の記載がなされている。

愛媛県—『明治37年愛媛県統計書』

品目別では油類、木蠟、製藍、和紙、麦桿及経木真田、革類、織物、畳表其産及莞筵、漆器、傘、元結、竹細工、燐寸、罐詰、石灰、下駄、足袋、鋳物、蠟燭、油紙、扇子及団扇、煉瓦・瓦があり、いずれも製造戸数、生産高（数量・価額）が記載されている。織物の製造戸数は4形態別であり、また織物には職工数（男女）の把握がある。綿糸紡績は個別工場ごとの記載となっている。このほか農業に属する製茶、製糸があり、明治32年と同様の記載となっている。

工場も明治32年と同様の記載である。

長野県—『明治38年長野県統計書』

工場 郡別、種類別（生糸、酒類、織物、其他）の工場数・職工徒弟人員（14才以上、14才未満）・原動機有無。個別工場欄もある。

品目別 織物、和紙、陶磁器、漆器、経木及麦桿真田、畳表及其産、煉瓦及瓦、酒類、醸造物（酒類、酢、醬油、味噌）、機械製麦粉、凍餅・凍菓子・凍豆腐、竹及蔦細工、鉄器、製革、雑工産物（元結、水引、塗櫛、桧笠、畳糸、薄荷腦、薄荷油、傘、罐詰、白木著、燐寸、木櫛、木通細工、莫大小、木蠟、扇子及団扇、燐寸軸木、玻璃製品、絹製手巾）で、陶磁器、漆器が生産数量を欠くほかはいずれも生産数量と価額を記載している。また、雑工産物のほかはすべて製造戸数を把握している。これらのうち織物は機業戸数は4形態別であるとともに、織機数（手織機）、職工数（男女）が把握されているほか陶磁器は窯数が記されている。蚕糸業は、製糸戸数は器械、座繰、玉糸別に10人繰未満、10人繰以上50人繰未満、50人繰以上100人繰未満、100人繰以上300人繰未満、300人繰以上500人繰未満、500人繰以上という規模別で把握され、器械系、座繰系、玉糸別の生産高が記されている。なおこの製糸には釜数も把握されている。

福井県—『明治38年福井県統計書』

品目別 蚕糸類、真綿、織物、紙、油、蔭蓆、漆液、漆器、陶磁器、製藍、製革、罐詰、石鯪、機械製麦粉、玻璃製品、生蠟、経木真田、煉瓦、瓦、工産物雑類（絹製手巾、

竹製品、扇子及団扇、屏風、打物、鋳物、玉石細工、唐木細工、石材、石灰、筆、笠、蠟燭、柳行李、藁細工）。生産高（数量・価額の両方または価額）と藁細工以外のすべてに製造戸数を記載する。この製造戸数は織物の場合は織物全体と輸出羽二重とにわけて4形態別に把握し、また蚕糸類は製造戸数を器械、座繰別に10人繰未満、100人繰未満、100人繰以上にわけた把握となっている。このほかに蚕糸、真綿、蔦蓆、漆液と工産物雑類以外には職工数が把握され、また織物には織機数が、陶磁器には窯数が記載されている。以上の品目のほかに酒、醬油、酢があり、製造人員と生産高を把握している。

工場は製品別、郡別統計があり、また明治32年とほぼ同様の個別工場記載がある。

3 『府県統計書』における工場生産の把握

前節では農商務省の統計規程とそれにもとづく調査結果の『農商務統計表』上の記載を基準とするいくつかの主要年度の『府県統計書』における工業生産の把握をみてきた。本節では以上をふまえてこの『府県統計書』における工業生産の把握の特徴をあきらかにしたい。

まず、この『府県統計書様式』における工業生産の把握は、「此表式ハ官省ノ令達等ニ依テ調査セル材料ニ基キ統計書ヲ編製スルノ主意ヲ以テ調製セシモノナリ」という『府県統計書様式』の趣意にもとづき、農商務統計規程にしたがったものとなっている。農商務省の統計規程によれば工業生産の把握は品目別の各種工業調査と一定の基準（職工10人以上）にもとづく工場調査との二系列のものとなっているが、各府県の『府県統計書』における工業生産の記載もこの二系列のものとなっている。工場調査の結果はいずれの県においても「工場細別」等の項目のもとに個別工場ごとの記載を行なっている。それは工場名称、製造品種、所在地、所有者名、創業年月、職工数、原動機の有無・その種類・馬力数等を記している。この「工場細別」は、岡山県の場合は大正5、6年に欠いたあとの大正7年を最終年度としてそれ以後はなくなり、愛媛県の場合も大正4年を欠いたあとの大正8年を最終年度とし、同じく福井県も大正8年が最終年度というように、長野県の場合のように明治39年を最終年度とするものもあるが、大正初年代まで記載されているのである。この「工場細別」の個別工場記載が当時のわが国工業の展開状況を検討していくうえでの重要な資料となることはいうまでもないであろう。

品目別各種工業調査はその品目、事項において、農商務省の統計規程にもとづく記載となっている。農商務統計においては、明治37年の様式改正により調査品目は大巾に増加し、これに各種工産物として一括されているものを加えると、その品目はかなり多くなるが、終始その主軸となってきたのは、織物、陶磁器、漆器、畳表・蓆・莞蓆、菜種油等油類、和紙、革類、マッチ、それに農業部に分類されていた生糸、茶、砂糖等であった。それらについて青銅器・銅器、木蠟、樟腦、薄荷、麦桿真田等をあげることができる。このほか綿糸、西洋紙については個別製造所の調査を行ない記載している。前節でみた各県の『県統計書』においてはこれらの品目について執拗に把握されており、『府県統計書』における品目別調査はこれらの品目を中心としていることはあきらかであろう。

これらの品目の調査記載事項もこれまた農商務統計におけるそれと同様のものとなっている。生産数量・生産額を共通の把握事項とするほか、製造戸数、職工数、さらには生産手段というように、生産条件をあきらかにする事項が加わってくるが、農商務統計においてはそれは品目によってかなり異なっていた。織物業が最も多項目の記載があり、少なくとも明治27年からは製造戸数、織機数、職工数、生産高（数量・価額）を把握していた。この織物につぐものに陶磁器があり、これは製造戸数、窯数、職工数、生産高を把握していた。窯数は登窯・錦窯等にわけて記載していた。これらのほかでは漆器、マッチ、青銅器・銅器、さらには油類、和紙、革類、木蠟、製藍、樟腦、薄荷類において製造戸数、職工数、生産高の把握がなされてきていた。前節でみた各県の『県統計書』においても、以上の農商務統計におけるがごとくの各品目の項目把握がなされてきている。織物業はいずれの県においても明治27年度から製造戸数、生産高とともに職工数、織機数を把握しているし、また陶磁器は岡山県を除いて他の県はいずれも製造戸数、生産高のほかに窯数を把握している。陶磁器のウエイトが小さく、産業構成上の陶磁器が大きな意味をもたないと思われる長野県の場合も含めてである。漆器、マッチにおける職工数把握、砂糖における搾車数把握も同様である。また終始多くの項目についての把握が行なわれた織物業は明治37年の統計様式改正によって、機業戸数を工場、家内工業、織元、賃織業という4つの形態別に把握することになるが、岡山県、愛媛県、福井県においては同年度から、長野県においては明治38年度からこれにしたがった記載を行なっている。このように農商務統計にしたがった項目把握を行なっているのである。

以上のごとくに『府県統計書』における工業生産把握は基本的には農商務省の統計規程

に規定された把握を行なっている。それぞれの府県にとっては大きな意味をもたないものであっても様式にしたがった把握を行ない、各府県の『府県統計書』は、『農商務統計表』と同品目を郡別に記載しているにすぎないという側面があるともいえる。郡別記載ということが同一県内でも地域的多様性をもって工業が展開する実態を把握するうえで決定的に重要なことであることはいうまでもないが、『府県統計書』はこの郡別記載ということにのみそのメリットがあるのではなく、少なからぬ点において農商務統計とは異なる各種工業の把握を行なっている。各種工業の品目に各府県において相違のあることは前節での4つの県の例によってもあきらかであろう。しかし『府県統計書』における工業生産の品目別は基本的なものは共通に把握されているのであって、品目上の各府県の差異は大きくない。このことよりも各品目の調査項目における『農商務統計表』と各府県の『府県統計書』との間の差異が大きな意味をもつものと思われる。そのいくつかについてみていこう。

まず織物業についてみる。織物業が農商務統計においても『府県統計書』においても終始調査品目であり、かつその調査項目が最も多いことはすでにみてきたとおりである。明治37年の統計様式改正により、機業戸数を4つの形態にわけて把握すること、特定の種類の織物について指定した府県からの調査を織物指定特別調査としてはじめていることなどが加わって、最も詳細な調査となっていた。ところで明治37年の統計様式改正にもとづく調査結果の『農商務統計表』、『府県統計書』における記載の仕方を見るとつぎのようになる。農商務統計においては織物業は機業戸数を工場、家内工業、織元、賃織業という4つの形態にわけて把握し、織機も職工もこの4形態別把握となっている。『第22次農商務統計表』に明治38年度分が記載されている。この『農商務統計表』と同じように、機業戸数、織機数、職工数を4形態別に把握し、生産額のみ一括把握というのは愛媛県、長野県、福井県の場合であり、岡山県は機業戸数のみ4形態別であとはすべて一括把握となっている(第1表)。機業戸数が4形態別に把握されているのみでなく、織機数、職工数も同様であれば、各形態1戸あたりの織機数、職工数が算出でき、各形態の平均的規模が算出できる。あるいは機業戸数、織機数、職工数の形態別比率を算出し得るのである。織機数が力織機と手織機にわけて把握されていることとあいまって、支配的な生産形態をあきらかにするうえでの大きな手がかりとなるのである。愛媛県、長野県、福井県の場合は織機数、職工数をも4形態別把握となっていることによつて、県内の地域別(郡別)に支配的な生産形態を検討するうえでの大きな手がかりとなっているのである。織機数、職工数がともに一

第1表 織物業の記載様式

		機業戸数	織機数	職工数	生産高
明治38年農商務統計	織物業	4形態別	4形態別	4形態別	一括
明治37年岡山県	織物業	4形態別	一括	一括	一括
明治37年愛媛県	織物業	4形態別	4形態別	4形態別	一括
明治38年長野県	織物業	4形態別	4形態別	4形態別	一括
明治38年福井県	織物業	4形態別	4形態別	4形態別	一括
	輸出羽二重	4形態別	4形態別	4形態別	4形態別

註 1) 『第22次農商務統計表』ならびに各県の当該年度の『県統計書』より作成。

2) 4形態別とは「工場」、「家内工業」、「織元」、「賃織業」別である。

括記載となっている岡山県の場合は織物業の生産形態は把握しがたい。

ところで、福井県の場合は輸出羽二重を再掲するが、この輸出羽二重については機業戸数、織機数、職工数のみでなく、生産数量・生産額をも4形態別に把握しており、この生産高の各形態1戸あたりの生産数量、価額を算出し得るのであり、これが加わって福井県の輸出羽二重業の実態はかなり詳細な検討をなし得るのである。すでに『第11回農商工年報』において明治27年度の福井県の織物業は絹織物、絹綿交織物、木綿織物、麻織物別に生産数量・価額が記載されるほか、絹織物は製造戸数、織機数、職工数をも把握していることをみてきた。この絹織物における把握はさらに羽二重、奉書紬、蝙蝠傘地、綾織手巾にわけて、それぞれについてなされているのであり、しかも第10回の明治26年度からそのようになっているのである。さらにさかのぼった『第9回農商工年報』には羽二重織物業者并其織機数という項目があって、羽二重業の機業戸数、織機数、1戸平均織機数を郡別に把握している。また、明治32年度の『第16回農商工年報』においても絹織物については、生産数量・価額だけではなくて、製造戸数、織機数、職工数を、羽二重、奉書紬、蝙蝠傘地、着尺物、薄絹、ハンカチーフの別に、それぞれについて把握していることもこれまたみてきたところである。このように福井県の場合は絹織物に関する把握が終始詳細であるといえよう。それは特に輸出羽二重業においてそうである。福井県は明治期に輸出羽二重の生産が急速に展開し、わが国輸出絹織物を担う主要な機業県となるのであるが、『県統計書』における以上のような把握は、この絹織物、輸出羽二重に関する県当局の関心・認識の度

合が示されているものといえるであろう。

つぎに製糸業をみよう。この時期をも含めて戦前期のわが国輸出品の大宗であった生糸生産の『農商務統計表』における記載は、第10次（明治26年度）までは生産高のみを、第11次（明治27年度）からは製造戸数をも記載している。第11次には製造戸数を製造所と自宅にわけて把握するが、第22次（明治38年度）にいたり、それを10人繰未満、10人繰以上50人繰未満、50人繰以上100人繰未満、100人繰以上にわけて、器械製糸、座繰製糸、玉糸別に把握するものとなっている。各県についてみると、岡山県、愛媛県、福井県は明治27年度は製造所、自宅別の製糸戸数把握を行なっているが、長野県は同年は生産高を把握しているにすぎない。明治37年の統計規程にもとづく規模別把握は岡山県、長野県は明治37年度から、福井県は明治38年度から『県統計書』にあらわれるが、愛媛県はこの明治37、38年度のみでなく明治末年にいたるも器械製糸、座繰製糸別の製造戸数、生産高の把握にとどまっている。岡山県は10人繰未満、10人繰以上50人繰未満、50人繰以上100人繰未満、100人繰以上の4階層区分、福井県は10人繰未満、10人繰以上100人繰未満、100人繰以上の3階層区分であるのに対して、長野県は10人繰未満、10人繰以上50人繰未満、50人繰以上100人繰未満、100人繰以上300人繰未満、300人繰以上500人繰未満、500人繰以上という6階層区分となっていて詳細であるとともに、釜数の把握も行なっている。愛媛県は西日本随一の製糸業でありながら明治末年にいたるも製糸業の把握は器械製糸、座繰製糸ということにとどまり、また長野県がわが国第一の製糸業でありながら明治27年度になお生糸の生産高を把握するのみであることは、この時期の製糸業の発展を『県統計書』によって検討することには大きな限界があることを示すものといえよう。しかし明治27年度には生糸生産高を記載するにすぎない長野県ではあるが、それ以降は第2表にみるような製糸業に関する詳細な記載を行なっている。特に大正6年からの器械製糸工場、器械製糸共同揚返工場に関する記載、大正12年の繰糸工女、揚返工女に関する記載は『長野県統計書』に独自のものであろう。長野県はわが国第一の製糸業にふさわしくこの製糸業についての独自の把握のあとをその『県統計書』に記してきているといえるのである。

最後に蘭苧業についてみよう。苧表苧産、花苧からなる蘭苧業は『農商務統計表』において終始把握されてきた数少ない部門のひとつである。農商務統計においては明治27年の「農商務統計様式」以降、製造戸数と生産額を把握することとなり、さらに明治37年の「農商務統計様式改正」により職工数を把握することとなる蘭苧は、『農商務統計表』の

第2表 『長野県統計書』における製糸業の記載

年 度	記 載
明治27年	生糸産数
28年	製造戸数、職工数、生産数量 6月末現在
29年	製糸戸数、釜数、職工数、原料繭額、生糸・屑糸産額
30年	製糸戸数（製造所・自宅）、釜数・製糸原繭・職工数（製造所・自宅別）
31年	生糸産額 捻造（器械・座繰）・打返し造・提造・島田造・鉄砲造・その他・計
32年 36年	蚕糸戸数（製造所・自宅）、生産数量捻造（器械・座繰・計）
37年 大正3年	製糸戸数 器械・座繰・玉糸別 各下記規模別 10人繰未満・10～50・50～100・100～300・300～500・500～・計 生産額 生糸（器械・座繰別）、屑糸、屑物
4年 5年	製糸戸数 10釜未満・10～50・50～100・100～・計 繰糸釜数・生産数量・価額・器械糸・座繰糸・玉糸・計
6年 11年	製糸戸数 器械製糸・座繰製糸・玉糸別に下記規模別 10釜未満・10～50・50～100・100～・計 製糸釜数、生糸生産高 器械製糸工場 工場数、事業者数、釜数、工男・工女数、1釜平均工女数、生糸製造高、前1ヵ年間就労日数、1釜別製糸高、1日1釜あたり製糸高 器械製糸共同揚返工場 工場数、事業者数、釜数、工男・工女数、1釜平均工女数、組合員数、組合釜数、製糸揚返高、前1ヵ年間就業日数
12年	蚕糸及真綿累年比較 製造戸数、繰糸釜数、生産額を器械糸・座繰糸・玉糸・計別に把握 製造戸数 10釜未満・10～50・50～100・100～300・300～500・500～700・700～1000・1000釜以上・計 職工数、生産高 器械製糸工場 6年～11年と同じ 座繰・玉糸工場 各工場数、釜数、工場・工女数、生糸製出高、平均繰業日数 器械製糸共同揚返工場 6年～11年と同じ 器械製糸工場繰糸工女年令別 器械製糸工女地方別（県内郡別・県外県別・出身者数） 繰糸工女勤続年数（器械製糸） 揚返工女勤続年数（器械製糸）

註 1) 各年度『長野県統計書』より作成。

第11次（明治27年度）から第21次（明治37年度）は製造戸数、生産高、第22次（明治38年度）以降は職工数が加わって記載されている。この蘭苧の各県の『県統計書』における記載状況はつぎのようになっている。愛媛県は明治27年度は製造戸数、生産額が記されるが、明治37年の規程にもかかわらず職工数は同年あるいは明治38年には記載がなく、大正3年度にはじめてあらわれる。長野県の場合も明治27年度に製造戸数、生産額が記載されるが明治37年を経た後年になっても職工数の把握は遂にないままである。福井県も同様である。このように各県の『県統計書』における蘭苧業の把握は『農商務統計表』と同様かあるいは職工記載を欠くなどむしろ後退している場合が少なくないといえるが、岡山県の場合はそれとは大いに異なっている（第3表）。明治27年度の『岡山県勸業年報』においてはまだ畳表苧苧として数量・価額のみであるが、明治28年度には畳表及其苧類と輸出向花苧とにわけ

第3表 『岡山県統計書』における蘭苧の記載状況

年 度	記 載
明治27年	畳表苧苧類 数量 価額
28年 } 29年	輸出向花苧 製造戸数 数量 価額 織機数 畳表及其苧類 " " "
30年	畳表苧苧類 製造戸数 数量 織機数（明治27～30年 全県一括） 錦苧苧、綾苧、畳表蘭苧 製作及製造人員 製作及製造名（明治27～30年）
31年	花苧、畳表、苧苧 製作及製造人員 製作及製造名（明治29～31年）
32年 } 33年	畳表 製造戸数 織機数 数量・価額 花苧 " " "
34年 } 36年	畳表 製造戸数 織機数 職工数 数量・価額 花苧 " " " "
37年 } 大正4年	花苧 製造戸数 織機数 職工数 数量・価額 畳表、苧苧 " " " "
5年 } 12年	花苧 製造戸数 職工数 数量・価額 畳表、苧苧 " " "

註 1) 各年度の『岡山県統計書』、ただし明治27年は『第17回勸業年報』、28、29年は第18回、19回の『農商工年報』より作成。

て、それぞれ製造戸数、数量のほか輸出向花菱には織機数が記載されている。『明治32年岡山県統計書』では畳表と花菱であるが、製造戸数と数量のほかにも織機数を把握し、明治34年度には職工数をも記載している。明治37年になると畳表真蓆の織機数記載はなくなるが、花菱は大正4年まで織機数が把握されているのである。すなわち、花菱については製造戸数、織機数、職工数、生産数量・価額が記載されているのであって、これによって生産条件を検討し得るものとなっているのである。花菱はこの時期のわが国の重要な輸出品であり、岡山県がこの輸出花菱の生産地であったが、『県統計書』における以上のごとき記載状況は県当局の花菱業に関する認識の度合を反映しているものといえよう。

以上の輸出羽二重業についての『福井県統計書』、製糸業についての『長野県統計書』、花菱業についての『岡山県統計書』の把握はあきらかに『農商務統計表』におけるそれを越えるものとなっているのである。本稿ではごく少数の県の『県統計書』について検討したにすぎないが、各府県の『府県統計書』はここでみたような、『農商務統計表』を越える工業生産把握を行なっていることが少なくないであろう。そしてこのような『府県統計書』における把握は、当時のわが国工業の発展状況を検討するうえでの重要な資料となるのである。

註

- (1) 拙稿「農商務統計における工業生産の把握」『岡山大学経済学会雑誌』第10巻第3号 1977年12月。
- (2) 内務省編『府県統計書様式』 1884（明治17）年 1ページ。（内閣総理府統計局図書館所蔵）。
- (3) (2)と同一書 101ページ。
- (4) 農商務省の統計規程については農林大臣官房統計課『明治二年以降農林省統計関係法規輯覧』 1932年 農林統計協会 による。

附記

本稿は1980年度文部省科学研究費補助金による研究（「農商務省期府県統計における工業生産の把握」）の研究成果の一部である。

（1981年8月31日）